



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

岩本, 武和

---

CITATION:

岩本, 武和. はじめに. 岩本ゼミナール機関誌 2008, 12: 1-2

ISSUE DATE:

2008-02-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57058>

RIGHT:

## はじめに

最初に3つお知らせがあります。

- ① 今年は、3年ぶりに「青竹会」を開催したいと思っています。日時と場所は下記を予定していますが、改めて連絡します。

日時：2008年9月20日(土) 17:00～19:00(開場 16:30)

場所：京大会館

- ② これまで、この機関誌は、卒業生からのカンパと、現役生からのゼミ費で発行してきましたが、**昨年と今年は、経済学部からの補助(学生学習研究支援経費)をいただくことができました**。他方、大学全体では本学で発行している学術雑誌等の電子ジャーナル(EJ)化を進めていますが、ゼミナールで発行している冊子体もEJの対象となること知り、この機関誌も下記

京都大学学術情報リポジトリ 経済学研究科・経済学部

<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/8956>

に登録しました。近日中に、これまでの機関誌が全て閲覧できるはずです。紙媒体での配布も近く終わりになるかもしれません。

- ③ これまで、私のHPは院生に管理してきてもらいましたが、時間を見つけて自分で作りました。

<http://www.econ.kyoto-u.ac.jp/~iwamoto/>

とりあえず講義ノートを貼り付けるためだけに更新する予定ですが、下手くそでみっともないので、近く業者にでも作り直してもらおうと思っています。卒業生・ゼミ生のページには、今は写真しか載せていませんが、いずれここを充実させて、上記①も含め、皆さんへの連絡拠点にしようと思っています。経済学部のHPも一新されていますので、一度お立ち寄り下さい。

昨年とうとう50歳代に突入し、未だ幼児たる愚息の成長と、数年すれば嫌でも回ってくるであろう学部や学会等での役職等を重ね合わせて、今後数年間の青写真を描きました。プランを立てることで、日ごと実感する気力・体力の衰えを何とか充たしていた私にとって、青天の霹靂ともいふべき事態に直面しました。先週の教授会において、次期の評議員(4月に総長から任命されるまでは、正確には、研究教育評議員候補者)に選出されました。皆さんは、大学の組織などには関心がないと思いますが、要するに学部では、学部長に次ぐ管理職とでも言えば、事の深刻さをご理解いただけるのでしょうか？ 今これを書いているのは、未だ動揺が収まらない中、差し迫っては、来年度の講義時間割の変更や、すでに引き受けた仕事等をどう調整しようか、という自転車操業の最中です。

このように、いつも私はボヤキながらの自転車操業なのですが、一晩ぐっすり眠った翌日には、何となく力が湧いてきて、まあ何とかなるさ、という気持ちになれる自分を信じているところがあります。子どもの頃からそうだったのか、色々な経験を経てそうなったのか分かりませんが、これを書いている今でも、きっと何とかなる(自分ならきっと何とかするだろう、あるいは、何とかならなければ、きっと誰[何]かが助けてくれるだろう)と心の隅では思っています。

私に大きな影響を与えた文学者の一人に太宰治がいます。太宰の評論家で敬愛する長部日出雄は、かつて次のように語りました。「太宰の作品中、最もユーモアが少ないのが後期の『人間失格』だ。この世は悪に満ちているが、人には善意もある。悪を避けながら、全面的な肯定でも、全面的な否定でもなく、総体としては人生を肯定する。だから人生は生きるに値する。そうした人生に対する〈ゆとり〉出てくるのが、ユーモア精神である。太宰中期の『お伽草紙』や『津軽』等には、こうしたユーモアが満ち溢れている」。私も、こうした意味での〈ゆとり〉とユーモアを、これからも失いたくないと思っています。

13期生の皆さん、卒業おめでとう。ゼミ長の佐藤君をはじめ、寺嶋君と入江君とは、1回生のポケゼミ以来4年間のつきあいでした。この学年には、こうした長いつきあいが多いはずだと思っていたところ、真戸原君のコンパでの一言は、近來にない名セリフとして、記録に残しておきましょう。

「先生、僕らより1年上の学年とは仲良かったですね?」「まあ、あの学年には\*\*君がいたからなあ、彼がまとめていたからだよ。」「じゃあ、僕らの学年のこと、避けてはなりません?」「そんなことはない。私も歳をとると、だんだんと若い人たちとは会話がしづらくなる。」「そんなこと言わはっても、僕らより1年下の\*\*さんとは仲良いやないですか?」「あれは特別や。それに、知ってるやろ、いつも\*\*君が間におったぞ。」「やっぱり先生、僕らの学年のこと、嫌いなんですか?」

宮崎君と中野さんは1年間留学、松田君は1年間欧州放浪の旅、宮崎君は立派な卒論を書き上げパークレーズに就職、松田君と真戸原君は国公を目指す、という多種多才な人材のなか、晝間君は、ISFJで「優秀論文賞」を獲得するという快挙を成し遂げてくれました。留学生の馬君と鄧君は、多様に関心が拡散する傾向のある日本人学生を、私が基本とするオーソドックスな勉学スタイルに引き戻す役割を果たしてくれたように思っています。

私にとって君たちは、真戸原君が言ったような「嫌いな学年」などではなく、やはり「記憶に残る学年」でした。

卒業生の皆さんかも近況報告をいただいています。いくつか紹介したいのだけれども、紙面および締切時間の関係上、全部は書けません。5期生の桑原朋子さんから、ウェディングドレスを着た写真付きの年賀状をもらったことには、ブッタマゲました。10年近くも前かなあ、彼女たちと行った金沢合宿は楽しくて、財務省(現在中国に留学中)の藤嶋君と、日銀の久田君と、桑原さんと私、4人で千里浜にドライブに行き、今でもあのときの傑作写真は秘かな家宝です。おめでとうございます。

非常事態に直面した焦燥感から、冷静な文章が書けませんでした。まあ、今の人生を総体として肯定する「ゆとり」と、そこから出てくるはずの「ユーモア」が、おそらくここ数年間の私を支えてくれるはずです。

9月20日(土)の青竹会でお目にかかれることを楽しみにしております。

2008年2月18日

岩本 武和